

5. 考察

1年を通して見られるタマショレイタケ科は、コナラの朽ち木（倒木）から多く見つかっているため、近年進行するナラ枯れの影響が推察される。また、調査の中で、2019年10月4日は全くキノコが見つからなかったが、2020年10月12日には多くのキノコが見つかった時があった。裏山の植生は特に変わっていないので、降水の影響を考えた。降水量は、気象庁のアメダスのデータを引用し、調査日の2週間前からのデータで比較した（図3）（図4）。多くの種数が見つかった時は、直前1週間の降水量が多かった。したがって、直前1週間前の降水量がキノコの種数に影響していると考えられる。

次に、30年前と今回の調査で、木から生えるキノコと地面から生えるキノコの種類の割合を調べた。すると、30年前の方が木から生えるキノコの種類が多い結果となった（図5）（図6）。この原因の仮説として、「近年は木の種類が減ったため、木から生えるキノコの種類が減った」や、「まとまった雨が降るようになったため地面から生えるキノコが増えた。」があげられる。いずれも今後もっと詳しく調べないとわからない。

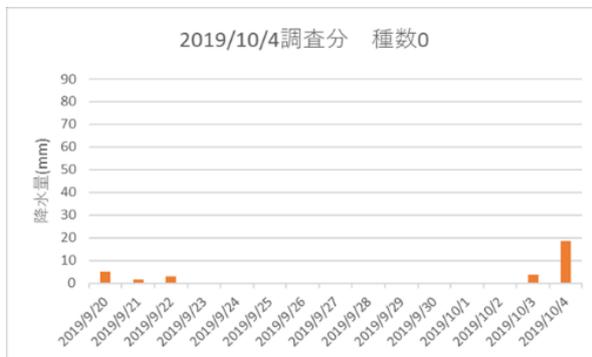


図3 種数0のとき

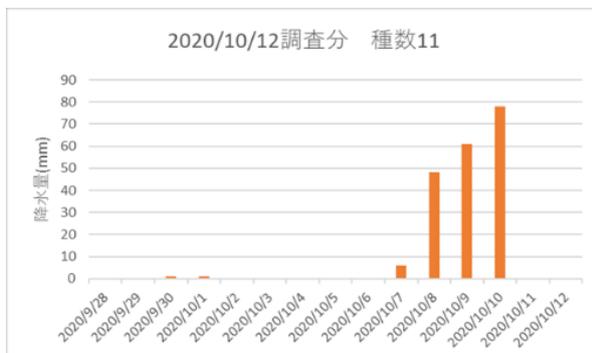


図4 種数11のとき

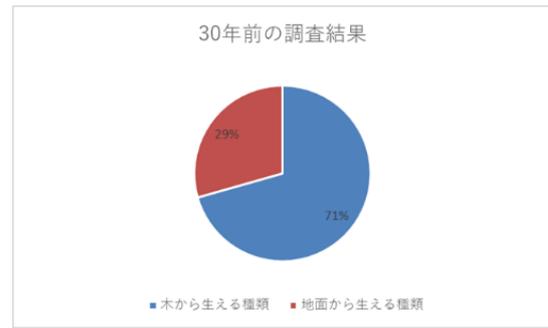


図5 30年前の調査結果の割合

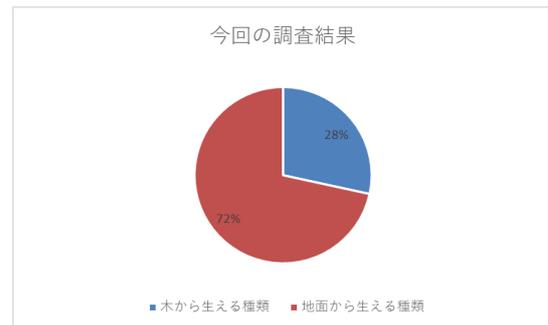


図6 今回の調査結果の割合

6. まとめ

- ・今回の調査で、29科 53属 95種が見つかった。
- ・降水量によって、同じ季節でも種数が大きく変化する。
- ・30年前と共通して確認されたキノコは、20種類であり、少なかった。
- ・30年前の方が、木から生えるキノコの割合が大きい。

謝辞

この研究を行うにあたり、大阪市立自然史博物館の佐久間大輔学芸員を始めとする、多くの方々にご協力いただきました。ここにお礼申し上げます。

参考文献

- 1) 池田良幸, 本郷次雄(2005), 「北陸のきのこ図鑑」, 橋本確文堂
- 2) 今関六也, 大谷吉雄, 本郷次雄(2019), 「日本のきのこ」, 山と溪谷社
- 3) 小宮山勝司(2006), 「きのこ大図鑑」, 永岡書店
- 4) 佐久間大輔(2019), 「きのこの教科書」, 山と溪谷社
- 5) 奈良教育大学教育学部附属中学校(2000), 「豊かな学校ビオトープの形成をめざす学校園の整備とそれを利用した教育実践」
- 6) 気象庁のサイト (https://www.jma.go.jp/jma/kishou/now/yougo_hp/tok i.html)